

マッカーサー元帥杯スポーツ競技会の成立と廃止

大久保英哲・山岸 孝吏*

The General MacArthur Cup Competitions : *Regarding their Establishment and Dissolution*

Hideaki OKUBO and Koji YAMAGISHI

The purpose of this paper is to clarify the establishment and dissolution of the General MacArthur Cup competitions. Despite having been one of the largest sporting events of the immediate post-war period, historical research into these competitions has so far been largely neglected. Principal sources for this research include official reports from the first MacArthur Cup Competition through to the eighth, the biography of Ikeda Masazo, and the minutes from meetings of the Japan Amateur Sports Association board of directors and council.

The results of this research can be summarized as follows :

- 1) The MacArthur Cup originates from April 1947, when Kansai business leader Ikeda Masazo made a sizable personal contribution to obtain three trophies, each with Allied Forces commander Gen. Douglas MacArthur's signature on it. Although prior to the first competition there had been some jockeying for primary influence among Ikeda Masazo, the Japan Amateur Sports Association, and the respective societies of tennis, soft tennis, and table tennis, the JASA eventually won out and the remaining two parties supported the system that was established. The first MacArthur Cup was held in Nishinomiya City in Hyogo Prefecture later that same year. The personal influence of Ikeda Masazo could be readily felt in that first competition due to his considerable financial support.
- 2) The name 'MacArthur Cup' came under increasing criticism around the 6th annual competition (1952) following Gen. Douglas MacArthur's decline in power and especially after his comment before the U.S. Congress that the Japanese are collectively "twelve years old". Immediately following the 8th MacArthur Cup, the name was officially changed to the National Inter-City Sports Meet, which for all intents and purposes dissolved the MacArthur Cup.
- 3) MacArthur Cup competitions were held in various cities across the country, and thus served not only to promote the world of sports to the general public, but contributed to both the construction of sports facilities and installation of equipment.
- 4) From the perspective of GHQ, the MacArthur Cup was part of a larger policy of democratization, and was expected to be a model for other sports competitions in post-war Japan.

As previously mentioned, the name of the supreme commander was on the crown of each trophy, and thus the MacArthur Cup competition reflected the rise and fall of its namesake. During MacArthur's ascendancy, the MacArthur Cup served as a basis for the recovery of sports in Japan. With MacArthur's fall from grace, however, and his subsequent comment about the Japanese being "twelve years old", his popularity suffered a sharp decline. Thus, according to historian John Dower, the Japanese public wanted to erase the supreme commander of the occupation from their collective memory. The renaming of the MacArthur Cup competitions must be seen in this context.

From a historical research perspective, the resources that led to this paper give excellent insight into the relationship between authority and sports, the character and direction of the Japan Amateur Sports Association during the postwar, and the issue of sports in the policies of the occupying GHQ.

1. 緒言

わが国の戦後体育・スポーツ界の動向は、関、草深、内海らによって解明されてきた(関, 1970, 1997)(草深, 1977, 1979, 1985, 1990)(内海, 1990, 1993)。しかし、それらにおいても、また『日本体育協会五十年史』(日本体育協会, 1963)においてもごく簡略な記述にとどまり、比較的詳細な歴史的事項まで収載した『近代体育・スポーツ史年表』(岸野ほか, 1999)においてはその記述さえ見られない戦後の全国的スポーツ競技会がある。それがマッカーサー元帥杯(以下「マ杯」と略す)大会である。

マ杯大会は、昭和22(1947)年、大阪の実業家池田政三の発案により、連合軍総司令官ダグラス・マッカーサーの名を冠したスポーツ競技会として出現し、第8回大会(昭和29年)まで開催され、以後は全国市長会長杯を争う種目別都市対抗競技大会として運営されている。主催者は、大日本体育会・日本体育協会(昭和38(1963)年改称)、以下「体協」と略す)であり、競技種目は硬式庭球・軟式庭球・卓球の三種目であった。内海(内海, 1993)によれば、戦後体協は皇国化を目指したといわれ、天皇杯をはじめとするいくつかの皇族杯スポーツ競技会を開催してきた(坂上, 2000, 2002)。このような中で、敗戦国日本の事実上の統治者となった連合軍総司令官の名を冠した競技大会の存在はいったいどのような背景の中で出現し、また消えていったのだろうか。そのような全国的競技会でありながら、これまで体育・スポーツ史研究にほとんど認知されてこなかった事実は何を物語るのだろうか。

そのような問題意識から、本稿では第1回大会から第8回大会までの『大会報告書』、池田政三に関する『一すじの道—池田政三の八十年—』、『日本体育協会理事会議事録』、『日本体育協会評議会議事録』を主史料とし、マ杯大会の成立から廃止にいたる過程を明らかにするこ

とを目的とする。

2. マ杯大会の成立

2. 1. 池田政三の略歴

池田政三は明治34(1901)年滋賀県生まれ。大阪など関西を中心に日東酸素工業株式会社ほか複数の会社を経営する実業家であった。昭和27(1952)年には宝塚市の教育委員長を務めるなど教育会でも活躍をしている。また早くからテニス、卓球を愛好し、数々の庭球競技会を企画するなどテニス界、卓球界の発展に尽力した。昭和40(1965)年には日本庭球協会副会長に就任している。平成元(1989)年、88歳で逝去。池田はこうに多方面に渡って活躍した人物である(表1参照)。

2. 2. マ杯の出現

昭和20(1945)年8月15日終戦を迎えた。「昭和二十年八月十五日、遂に無条件降伏となり、全国民は茫然自失の状態となったのである。そして、その結果国土に上陸する占領軍により、われわれ日本人の生活の思想も教育もすべてこれを剥奪され、自由と向上は今後の日本から抹殺されてしまうであろう、と観念したのは絶望と恐怖に覆われた当時の日本人全部の気持ちだったと思う」(刊行委員会, 1980, p. 230)と池田は絶望的な思いで占領軍による圧制を予想していた。

占領軍による「非軍事化」政策のもとで不要になった日本軍の物資を基に事業を拡張していた池田は、しかしながらマッカーサーを中心とする占領軍の民主化政策を目のあたりにし、その絶望は一転してマッカーサー崇拜へと変わる。「…戦勝国以上の食糧と経済援助を与え、戦前以上の高度な教育を与えた占領軍総司令部マッカーサー元帥が、偉大な政治家であり且つ思想家であるだけでなく、曾ては米国オリンピック委員長であり、第九回 IOC 米国選手団長であることを知った私は、思想的にも経済的に

表1 池田政三の略歴

池田の経歴	西暦	池田のスポーツ歴
滋賀県甲賀郡で父政治郎、母かねの三男として誕生	1901	
		小学校時代に次兄の影響をうけテニスを始める
大阪市立実業高校卒業	1919	18歳の時に肺炎カタルを患い転地療養を余儀なくされるが、テニスに没頭し病状が回復。
猪印メリヤス製造販売創業	1919	大阪府下のテニス大会に次兄と組んで優勝
寺崎登みと結婚	1924	大正13年（1924年）から昭和2年（1927年）にかけての3年間で大小合計31回の大会優勝を記録
	1927	福知山高等女学校のテニス指導を依頼され、指導を始める
福知山に移住しスポーツ用品「不盈堂」を創業	1927	福知山高等女学校を中心とする十有余の学校に指導を頼まれ、テニス、卓球の指導を無報酬で行う。自ら経済的、実務的負担により全関西軟式庭球大会、池田個人主催の関西大会、全関西大会女子大会などの庭球大会を創設。昭和2年には池田が中心となり福知山卓球協会を設立、翌年一般男女卓球大会や女児童の卓球大会も開催
大阪へ戻り大阪計量器同業者組合に入社	1932	当時3つに分裂していた大阪卓球界のとりまとめに尽力。日本卓球協理事事及び卓球機関紙を発行する日本卓球社の社長に就任
	1933	大日本工場スポーツ連盟関西支部の常任理事に選任
		大阪庭球倶楽部の主将として活躍
日東炭酸株式会社を創設し、代表取締役役に就任	1937	
	1938	昭和13年には同倶楽部の会長に就任
	1939	同会が全国軟式庭球大会を開催
	1940	大阪府軟式庭球協会と日本庭球連盟大阪支部の軋機を解消し一本化に尽力する。
1945 アジア太平洋戦争・敗戦		
	1947	第一回マッカーサー元帥杯競技大会の開催
	1948	大阪庭球協会、大阪府レクリエーション協会の会長に就任
日東炭酸工業株式会社（日東アセチレン株式会社の前身）を設立し取締役社長に就任	1949	関西学生軟式庭球連盟会長、西日本学生軟式庭球連盟会長、及び日本学生軟式庭球連盟の副会長に就任
	1952	宝塚市体育協会会長に就任
新日東炭酸株式会社を設立し取締役社長に就任	1956	
宝塚市教育委員長に就任。昭和44年（1969年）に退任するまでの4期13年間教育界に尽くす		
日東アセチレン株式会社設立、代表取締役社長に就任	1959	
大鋼商事株式会社の取締役会長に就任	1961	
	1965	日本庭球協会の副会長に就任
	1971	全日本ベテラン軟庭大会を創始
	1972	70歳でスポーツ振興の功により勲四等旭日小綬賞を受賞
	1973	西日本OG軟式庭球連盟を創設し、第一回レディース軟式庭球大会を開催
逝去（88歳）	1989	

注 刊行委員会（1980）一すじの道一池田政三の八十年一、より作成

も混乱状態の日本の将来を、平和と文化を基調とした文化国家たらしめるためには、スポーツの持つ特性を高度に生かした、正しいスポーツとスポーツマンシップやファイティングスピリットを昂揚することこそ第一義であると確信した」（刊行委員会，1980，p. 230）。そして池田は、「...打ち挫がれた戦後の日本に明るい希

望の新風を贈るために、若し国民の敬愛するマ元帥の好意によって『マ元帥杯競技』が生れたら、どんなに日本人全体に明るい希望と感激を与えるであろう...」と、マ杯大会を着想するに至った（刊行委員会，1980，p. 230）。

昭和22年（1947年）4月1日、池田は知人のメレル・ボリスの紹介によりマッカーサーに面

会する機会を得た。その際連合国軍総司令部に池田は銀製カップを持参し、マッカーサーに大会の開催を請願した。翌日、マッカーサー自らサインをしたカップを渡され、事実上の開催許可を獲得した。このように単独で直接に大会開催許可を得た池田は、自ら大会を企画し開催へと動き出し、数日後各新聞社を集めて大会開催計画を発表した(刊行委員会, 1980, p. 614)。

2. 3. 大日本体育会と競技団体の介入

マ杯委員会の設立

マ杯大会開催の発表が新聞記事に載った2日後の4月9日、大日本体育会の理事会でこの件が議題として取り上げられている。「天皇総裁推戴、マッカーサー杯授与等の問題は個々の種目別団体で行う可きものではなく、又行ふとしても事前に本会と打合せすべきではないか...マッカーサー杯については卓球、庭球連盟本部でも何等干知していない...」(大日本体育会, 1947a)と、大日本体育会は、池田が勝手に大会準備を進めていることに対し強い不快感を示していることがわかる。

一方池田は、大会運営の協力を要請するため、4月26日に大日本体育会を訪問した。この時池田は、「...本杯の運営に関し、慎重熟慮検討の結果三競技首脳者を中心として組織する『財団法人、マックアサー元帥杯スポーツリーグ』を創設し 之に依り運行する事...」(マ杯委員会, 1947, p. 2),そして「この財団に私は一,〇〇〇,〇〇〇円を寄付する」(刊行委員会, 1980, p. 114)と、運営組織として体協とは別な財団法人を設立すること、その資金として単独で100万円の寄付を行う意向を表明した。ちなみに、前年昭和21年度の大日本体育会の総収入は、合計117万円余であり(体協, 1963, p. 540)、池田の寄付金額の大きさがわかる。

さて池田の訪問に対して、関係者はどのような反応を示したのだろうか。池田の訪問の4日後、4月30日の大日本体育会理事会議事録には次のように記されている。

「日本炭酸株式会社取締役社長池田政三氏がマッカーサー総司令 のサイン入りカップ三個を同側近を通じて受領し之を卓球、庭球、軟式庭球の三種目の優勝者に授与する何等かの大会を企画せんとするに對し清瀬理事長から同氏と会談の結果カップ及維持費の管理につき委員会を本会内に設置するが如き方法も一案と考へる旨の報告をした。之につき岡田理事から本件の経緯は庭球協会としては何等関知していない所であるが、事柄の性質上放置することも如何かと考へ右池田氏と会談し、カップの無条件寄贈を第一案として要求し、さなければ卓、軟庭と相談の上改めてその管理の手段方法を相談したい旨を述べておいたとの説明があつた。...尚ほ本件に關連し、鈴木良徳氏から今後国家代表的賞盃等の受領は全国代表体育団体の議を経る様すべきであるとの提議があつた」(大日本体育会, 1947b)。

つまり、大日本体育会は杯を「国家代表的賞盃」とみなし、その運営組織を大日本体育会内に置くよう主張している。いっぽう庭球協会もこれまで全く関知していないこと、しかしながら放置するわけにも行かないので、マ杯を無条件で協会に譲渡したうえで管理運営するよう要求した。つまり運営組織をめぐって、池田による新財団法人設立案、大日本体育会による大会委員会吸収案、庭球協会による種目別運営組織案の3つが鼎立していたことが分かる。

その後、5月7日に大日本体育会と三競技団体関係者の二者による打合会が開かれ、財団法人設立の必要がないこと、杯については「関係団体に委任することが妥当」(下線筆者)と意見が一致している(マ杯委員会, 1947, p. 3)。さらに「関係団体」については、5月14日の大日本体育会理事会で「庭、軟庭、卓、三団体の意見が無条件で本会に寄贈を求めることに纏つたので十七日池田氏と会見してその打合せをすることとなつた」(大日本体育会, 1947c)と、大日本体育会が池田氏からマ杯を譲渡を受ける形で競技団体側も了承したかのような記述が見られる。しかしこの決定については、池田も競技団体側も十分に納得したものではなかった。5月17日に開かれた大日本体育会及び三競

技団体関係者、そして池田を交えての打合会において、三者のヘゲモニー争いは再び表面化する。この打合会では、まず池田がマ杯下附までの経過と財団法人設立の意図を説明し、「個人としての名誉心や執着心は一切ない、唯本大会が長く盛んにスポーツの発展と日米親善に寄与することが出来、本杯が完全な責任に於て管理される最善の方法が確立され、ば満足である」と暗に財団法人設立の希望が述べられた。これに対し、各関係団体からは「夫々無条件に各団体への譲渡の方が元帥杯の趣旨に副うから法人組織設立は必要ない」と競技団体による組織運営が力説されている(マ杯委員会, 1947, pp. 3-4)。ここで折衷案を提示したのが大日本体育会であった。「...結局体育会内に委員会を組織して一切を委員会に依り運営すること、し、委員の構成は各種目団体と体育会側及池田氏の三者が協力してやる」と、運営組織としての委員会を大日本体育会内に置き、競技団体と池田がこれに協力する形をとることで決着が図られた(マ杯委員会, 1947, pp. 3-4)。この件について大日本体育会は後に「...本会では、スポーツ大会の開催は本会が統轄すべきであるという原則を堅持して、池田氏と折渉の末、本会内に、マッカーサー元帥杯委員会を設けて、この委員会で大会の管理運営をすることに決定した」(日本体育協会, 1963, p. 110)と振り返っている。結局は折衷案と言いつつも大日本体育会が主導権を握る形でマ杯大会を吸収したと言えよう。

しかし、競技団体からすれば大日本体育会のこの提案は不満の残るものであった。2日後の打合会では、卓球協会関係者から「委員会は大日本体育会の一委員会であつて事業の執行機関でない」(マ杯委員会, 1947, p. 4)と、マ杯委員会を大日本体育会内に置いてもよいが、大会運営は自ら(競技団体)が行う旨が主張されている。この卓球協会関係者の主張は、大日本体育会の強引な解決法に対する不満を物語るものであろう。しかし池田のとりなしもあり、大

日本体育会内に設けた委員会に各競技団体、池田が協力し運営する(委員会と各競技団体の共催)形となった。なお、この時打合会で「委員会の委員は各団体三名(内一名は関西地方から選出のこと)体育会側三名(清瀬委員長、池田副委員長を含む)とする」、「本年度(昭和二十二年)の大会は八月二十九、三十、三十一の三日間とし、関西地方で開催する」、「大会の開催は、委員会と各種目別団体との共催の形をとる」ことが決定されている(マ杯委員会, 1947, p. 3)。これらは5月21日の第1回委員会で正式決定され(マ杯委員会, 1947, pp. 21-22)、大日本体育会に吸収される形で、大会の執行機関としてマ杯委員会が発足した。

2. 4. 第1回大会の概況 昭和22(1947)年

第1回マ杯大会は昭和22(1947)年8月29-31日の3日間、西宮市で開催された。大会の主催は財団法人大日本体育会マ杯委員会であり、これに日本庭球協会、日本軟式庭球連盟、日本卓球協会が共催として加わっている。また後援団体は文部省、大阪府、京都府、兵庫県であった(マ杯委員会, 1947, p. 50)。大会経費は、「所要経費二十四万円は二十万円を池田政三氏の寄付金、四万円を大会収入によることとなっている」(マ杯委員会, 1947, pp. 7-8)と実質的には池田の財政的な支援によって初めて可能な大会であった。西宮市開催もそのような関西財界人池田の影響力のひとつと見てよいであろう。

8月29日、午前9時から甲陽中学校大講堂で三競技合同の開会式が行われた。式次第を見ると、入場行進、米軍軍楽隊の演奏、マッカーサー元帥の挨拶(ノヴィール少佐代理)、内閣総理大臣、文部大臣の祝辞(代理)、「マッカーサー元帥杯大会の歌」の合唱(マ杯委員会, 1947, p. 50)と「荘厳な式典とともに、当時のスポーツ界では音楽を配した異例な絢爛豪華な開会式」(刊行委員会, 1980, p. 118)であった。ちなみに前年京都府を中心に行われた第1回国

体の開会式は「GHQにより集団的行進や宗教的行動および国旗や国歌は御法度とされていた」(日本体育協会, 1978) ため, 入場行進も行われず, 関係者挨拶, 来賓祝辞, 選手宣誓だけでごく簡素に行われただけであった。

さて開会式におけるマッカーサーの挨拶(代理: CIE 体育担当官ノヴィール)を見てみよう。(マ杯委員会, 1947, pp. 30-31)。

「ボツダム宣言によつて定められた線に沿つて全日本国民が其の社会再建の為あらゆる努力をかたむけて居る今日, 競技的スポーツに対する一般の興味が益々高められて行く事を見ることは洵に喜ばしい限りである。民主主義の先駆者であるギリシヤ人の昔から, スポーツは良い社会人を構成するに必要な自他に対する態度を育成する手段の一つとして民主主義社会に於て重要な地位を占めて来たのである。スポーツに於ては日本はその過去に多くの良き技と成功の歴史を持つて居る事は誠に幸せである。悪統制と封建的思想から完全に解放されたならば, スポーツといふものは民主主義と言う名によつて統括されてゐる諸種の理想と行為とに甚大な貢献をなす事が出来るものである。この競技会が日本のあらゆるスポーツ行事の範となり, 自由にして幸福なる社会に於て若き男女が其の体育的方向に於て各自のおさめた技を充分に發揮出来る機会を与えるものとなる様に望んでやまない」

これによれば, スポーツは占領政策としての民主化の一手段に位置づけられ, 民主主義の理想と行為に大きな貢献をなすこと, この大会が日本のスポーツ行事の範になることが期待されていることが分かる。実際, 占領軍(CIE)はこの第大会の参加資格について「競技団体(体協)加盟者」に限ろうとしたマ杯委員会(体協)原案を破棄させ, 「日本人であれば誰でも参加できる」よう修正させている(マ杯委員会, 1947, p. 16)

この西宮の大会は3種目の総合力を競う都市対抗形式の中央大会であった。「三競技共全国日本都市予選を次で府県予選を更に地域豫選を行ひ, 最後に中央大会を挙行する事に決定した。此の三つの競技は, 何れも男も女も老人も子共

も総合したチーム制を採用した試合方法で行はれ, 仮令一種目に強くても総合力のないチームは弱体となる為め皆んな協力し朗かに然も斯道の急激な発展策を織込んだ点等に特徴が認められる」(マ杯委員会, 1947, p. 1) だったからである。つまり大会は, 意図的にスポーツ層の拡大, スポーツの広範な民主化・大衆化を目指した方策が採用されていたとも言えよう。

この中央大会には3競技合わせて男子271名, 女子120名の合計391名が参加した(マ杯委員会, 1947, p. 34)。硬式庭球は池田市が, 軟式庭球は岡山市が, 卓球については, 京都府が優勝し, マ杯を獲得している(マ杯委員会, 1947, pp. 32-33)。

このように盛大におこなわれた第1回大会であったが, 9月3日の大日本体育会理事会議事録には「無事終了したが池田政三氏の個人的色彩が多分に認められたので次回は一層留意して実施し度い」(大日本体育会, 1947d) との記述が見られ, 第1回大会における池田の影響力の強さが逆照射できよう。

3. マ杯大会の展開

昭和23(1948)年, 第2回大会は, 前回同様, 池田政三を中心とし, 大日本体育会・体協(大日本体育会は昭和23年10月に日本体育協会に改称した), 三競技団体関係者らによる委員会によって運営された。開催地は東京, しかも両庭球は皇居内の新設パレスコート、卓球は皇居内柔剣道場であった済寧館で実施されている。戦後皇居内で行われた唯一の全国的スポーツ競技会である。

その後昭和24(1949)年第3回大会から各地方都市で開催された。第3回大会は広島市, 第4回大会は京都市(昭和25年), 第5回大会は新潟市(昭和26年), 第6回大会は長崎市(昭和27年)であった(表2参照)。これは, 地方末端までスポーツを浸透させるというスポーツの国民大衆化を目指した戦後初期の体協の方針

表2. マッカーサー杯大会の推移

回	開催年	開催地	備考
1	昭和22 (1947) 年	西宮市	庭球：池田市, 軟庭：岡山市, 卓球：京都市優勝
2	昭和23 (1948) 年	東京都 (皇居内)	庭球：池田市, 軟庭：東京都, 卓球：京都市優勝
3	昭和24 (1949) 年	広島市	庭球：池田市, 軟庭：東京都, 卓球：京都市優勝
4	昭和25 (1950) 年	京都市 (二条城)	庭球：東京都, 軟庭：岡山市, 卓球：東京都優勝
5	昭和26 (1951) 年	新潟市	庭球：東京都, 軟庭：四日市市, 卓球：京都市優勝
6	昭和27 (1952) 年	長崎市	庭球：池田市, 軟庭：四日市市, 卓球：京都市優勝
7	昭和28 (1953) 年	岡山市	「マッカーサー記念杯全国都市対抗 (庭球・軟式庭球・卓球) 競技大会」へ改称 庭球：東京都, 軟庭：岡山市, 卓球：柳井市優勝
8	昭和29 (1954) 年	松山市	庭球：東京, 軟庭：四日市市, 卓球：東京都優勝
(9)	昭和30 (1955) 年	会津若松市	全国都市対抗委員会「全国市長会長杯」へ改称

注 刊行委員会 (1980) 「すじの道—池田政三の八十年—」, より作成

が影響したものとみられる。そのためマ杯大会はその規模は異なるものの、地方都市のスポーツ施設設備、用具の整備充実や地方へのスポーツ浸透など国体と同様の役割を果たしたとも言えよう。

また地方都市を持ち回る過程で徐々に大会の占領軍の影響が薄れていった。第4回大会 (京都市, 昭和25年) は国宝二条城内で開催されたが、マ杯大会の特徴の一つである占領軍のブラスバンド演奏が消えた。

昭和26 (1951) 年4月, マッカーサーは米国大統領トルーマンにより連合国軍最高司令官を解任され, 帰国した。そして, 5月5日米国上院議会にて証言を行った。その席上「日本人はすべての東洋人と同じように勝者にへつらい、敗者を軽視する傾向がある。... , 日本人は現代文明の標準からいえば, まだ十二歳の少年である」(朝日新聞, 1952) と日本人を侮辱したととれる「日本人十二歳」発言を行い, 日本国内で大きな波紋を呼んだ。

その後第5回大会 (新潟, 昭和26年), 第6回大会 (長崎, 昭和27年) が行われたが, マッカーサーの挨拶は消え, 大会関係者の祝辞の内容にも変化が見られた。特に日本の独立後実施

された第6回大会 (長崎, 昭和27年) では, 後述するように, 地元関係者から大会に対する熱意が失せたとの声も聞かれるようになった。

4. マ杯大会の廃止

4. 1. 体協運営離脱問題

体協は, マッカーサー解任直後の昭和26 (1951) 年4月25日には, 「マ杯は元帥の解任後こそ意義あるものと考える」(日本体育協会, 1951a) とまで述べ, 大会の存続を訴えていた。しかし, 対日平和条約の締結に伴う日本独立 (1951年9月) 後の第6回大会 (長崎, 昭和27年) 頃から, 一転してマ杯大会に対して否定的な態度に方向転換していく。

第6回大会後, 8月15日の体協合同打合会では「マ杯大会は今後継続して行う意志ありやとの鈴木委員の質問に対し, 継続する意志はあるが, その内容組織, 名称等について研究の余地がある」(日本体育協会, 1952a) と, 大会を継続することに対して疑問の声が起きていることがわかる。これに加え, 同日行われた体協評議委員会においては, 第6回大会 (長崎, 昭和27年) について「競技団体の主体性が乏しかっ

た」こと、「大会は今後、その構成、名称等に研究の余地がある」との指摘もされている(日本体育協会, 1952b)。その後昭和27(1952)年10月7日のマ杯委員会では、「マ杯大会は今後も継続して実施したい。大会が体協を離れて三競技団体の連合により運営されることになつても委員会は必然的であると思う」(マ杯委員会, 1954, p. 30)と、大会から体協が離脱する可能性を示唆している。このような状況を受けて、第7回大会開催地である「岡山側から招致の関係もあるので本年までは従来通りに願いたいとの希望があつた」。そのため「協議の結果名称を『マッカーサー記念杯全国都市対抗(庭球・軟式庭球・卓球)競技大会』とする」措置が採られた(マ杯委員会, 1954, p. 30)。この背景には、第6回大会開催の「長崎側から『今更マッカーサー大会でもあるまい』という一般の声がある」(マ杯委員会, 1954, pp. 29-30)と記されているように、マッカーサー解任、さらに「日本人十二歳」発言を機にマッカーサーの名が付いた大会を忌避しようとする風潮が生じていたことが考えられる。

さて大会の存続については、大会を改称することで問題の解決を図ることができた。しかし、大会運営から体協が離脱する問題については更に深刻な議論が繰り返されている。

昭和28(1953)年1月28日には体協理事会では、「国体委J・O・Cに属せざる事業に関する件... 両委員に属せざる委員会及びその他の行事については左の如く決定した... マッカーサー杯委員会～実施三団体に一切を委ねて体協は関与しない。マッカーサー杯委員会という名称は残るかも知れないが前記の如く三団体の合同によるものである。若しカップを返還するようになつても一切三団体にまかせる。この結果同委員会は解消」(日本体育協会, 1953a)と過去の統治者の名がついた大会との関わりを断ち切ろうとし、体協内部にあるマ杯委員会は解散するという方針まで打ち出した。

これに対し三競技団体と次回開催地である岡

山側から次のような大会存続を求める強い反発が示された。

「本大会はその成果よく、スポーツの普及に極めて役に立っていること」、「参加側は体協の事業であることが参加のための有利な条件であること」、「小地方の施設に最も手頃である」、「本年度開催地は既定の事業で進めているので絶対に困る。少くとも本年度は従前通りとし分離案はその後にについて研究されたい」(マ杯委員会, 1954, pp. 31-32)。

この後、決着がつかぬまま第8回大会(昭和29年)の会場を募集する時期となった。しかし、マ杯委員会において「体協から独立した委員会となれば、都市の援助が無くなる傾向が強くなることは事明である。これは大会の開否に至大な関係がある」、「体協が本大会から関与しなくなつた場合は本大会を推薦する母体がなくなり、三競技団体個々別になる可能性がある。しかも、別々になることは、本会の消滅を意味する」との意見が出され、結局は体協が大会運営から離脱しないよう三競技団体会長名で体協会長に宛て陳情書を提出することになった(マ杯委員会, 1954, p. 33)。

そして6月3日の体協理事会にて陳情書をもとに、大会主催に関する体協参加の賛否が話し合われた。ここでは、三競技団体の強い希望を受け入れ「多数の賛成」により大会に体協が加わり開催されることが決定した(日本体育協会, 1953b)。

しかし、6月26日の体協評議会においてこの理事会決定は白紙に戻されている。体協理事会議事録、マ杯委員会議事録からは、誰から異議が出されたのかわからないが「更に当該競技団体から本会の事業としなければならない理由を直接訊くこととし、次回に三団体の説明を求めた上評議委員会として可否を決める」(日本体育協会, 1953c)こととなり、第8回以降の大会の体協主催問題は再び保留された。

その後、昭和28(1953)年8月第7回大会(岡山)終了後、9月3日体協評議会にて今後の大

会方針が議論されている。まず、マ杯委員会委員長であり、体協常務理事でもある東俊郎から「年度の事業を決定するに当つて、体協としては国内的には国民体育大会のみとする」「本年度のマ杯大会は岡山市の要請もあり従前通りとした」、「本会理事会では三競技団体の熱望とマ杯の性格上、存続を決定した。マ杯の性格とは、マ元帥が帰国後になつてカップを放棄することは面白くないし、他の連合競技会が新に生じてもそれとは自らその趣を異にするという意志であつた」と、議論の経緯が述べられている（日本体育協会、1953d）。

東の説明に対し、清瀬国内スポーツ委員会総務主事からは「三競技団体の自主的努力が不足していないか」、松沢体協理事からは「マ杯大会の存続意義は認められるが、体協が直接協力しなければならない理由はない」、田畑体協専務理事からは「五大都市大会も同様に考える必要が生じないか」、松本体協理事からは「マ元帥の留日中の国際スポーツ関係に特別な厚意があつた事は忘れてはならないと思う」、東からは「体協の事業とするか、否かということに尽きと思う、何れかを決定したい」との意見が出された（日本体育協会、1953d）。

そしてこのような議論を経て、清瀬から「猶予期間を置いて、三団体の努力を俟つては如何」との提案がなされた。最終的には「体協としては国際行事はオリンピックと亜細亜大会、国内行事としては国体一本という基本線を再確認し三競技団体主催移行する準備期間として、三年間だけは従来通り形式で行うか、その以後は体協は関与しない。その間に、三競技団体は自主的に努力してマ杯大会が自立できるよう育て上げる。．．．以後は体協は関係せず三競技団体に委す」（日本体育協会、1953d）こと、つまり体協の3年後の撤退案が決定された。

4. 2. 全国市長会会長杯の登場とマ杯大会の廃止

マ杯大会は、中央大会の参加料を無料とし、

遠征費は参加都市が負担することになっていた。地方予選会については、必要な場合は選手から参加料を徴収することになっていたが、それ以外は、主催する都市町村もしくは都市町村と競技団体の両方からの支出と、マ杯委員会からの補助金で賄われていた。しかしマ杯委員会は財源をもたず、補助金の実際の出所は中央大会の開催都市であつた。先述した体協の運営脱退問題は3年間の猶予期間をおくことで一定の解決を図つたが、この影響は大会の財源不足問題を表面化させた。

第7回（昭和28年、岡山）大会後、「担当県が何県になるかは補助金支出することに依り開催を承諾する場合が多い、全く補助金がなくなることは地域予選の開催も危ぶまれる」との危惧が示された（マ杯委員会、1954, pp. 35-36）。これは地域予選＝第3次予選をどこの県で行うかを決定する際に、県側はマ杯委員会からの補助金支出を条件に引き受ける場合が多い現実を背景としたものであつた。つまり、中央大会を行う都市からの補助金支出がなくなると、地域予選すら開催できなくなる可能性が生まれるというのである。

一方で、「競技団体としては大会を継続する為全体的な予算を考慮し、出来るだけ節約する」要望も出されている（マ杯委員会、1955a, p. 29）。これは、大会運営費を支出する開催県・市の負担を軽減するためであろう。経費削減の傾向は第6回（昭和27年、長崎）大会頃から見られてきたが、マッカーサーの解任、そして体協の運営脱退問題の影響が、開催地の経費削減と地域予選補助金増額という矛盾となって現れてきた。

この大会の財源問題をめぐって、昭和29（1954）年4月8日のマ杯委員会において、大会発案者である池田副委員長から「中央大会へ参加する各都市の市長を本大会参与に推薦したき」旨の提案がなされた（マ杯委員会、1955a, pp. 29-30）。これは、参加各都市の経費支出に便宜を図ろうという思惑があつたものと推察

される。これは9月7日のマ杯委員会で、正式決定されている。

その後昭和29(1954)年9月23日から26日まで第8回大会が岡山市で開催された。大会期間中にマ杯委員会が開かれ、第9回大会の招致と大会の性格について話合われた。「本大会の性格については、今次大会参加者決定の都市の中からも経費の点で不参加した県もあり、名称の問題を併せて会場地が決定しても参加都市が少なくなる様では大会の意義が失われるので、次回委員会でこの点について協議することとした」と、中央大会に経費の面で不参加する都市が出現した問題がとりあげられている(マ杯委員会, 1955a, pp. 32-33)。こうした中央大会を棄権する傾向は、日本独立後の第6回大会(長崎)から卓球競技で鶴岡市、塩釜市の例が見られ、第7回大会(岡山)では札幌市が軟式庭球、卓球の両方に棄権している。第8回大会(松山)においては、青森市が経費の面から中央大会を棄権している。またこの第8回大会(昭和29年)におけるマ杯委員会では「...尚本席上では市長杯の寄贈を受け、その争奪の対抗競技にしたらば良いとの案が出た」との提案もなされている(マ杯委員会, 1955a, pp. 32-33)。つまりここで初めて「マッカーサー元帥杯」の冠名を削除する見解が出された。

その後体協理事会においては、「此の大会も再来年まで本会マ杯委員会でいい第十一回大会より三競技団体が行うことになっているが、参加側はマ杯の名称が好ましくないで三競技都市対抗としてほしい意向が強い」(日本体育協会, 1954a)という参加者側からの意向が示された。これに加え第9回大会の開催地決定に際し、「松山市と共に勧誘を表明していた若松市を第一候補として協議し...若松市に折衝して居たところ、今日その返事を受領した、これに依ると開催希望は大いに持っているが、...マ杯の名称は困る。とのことであつた」(マ杯委員会, 1955a, pp. 33-34)。これを受けて「若松市に依頼するとしても、又一般に募集すると

しても、この際大会の性格を改正する時期に来て居ることは明かであるとして、協議の結果、次の方針で準備を進めることとした。マ元帥優勝杯は、存置するが、新たに全国市長会会長杯の下附方を申請する」(マ杯委員会, 1955a, pp. 33-34)ことに決定した。

昭和29(1954)年12月8日、全国市長会会長杯の下附の決定が報告され(日本体育協会, 1954b), 「(1)大会名称及び委員会名改称すること」, 「(2)大会の回数を継続すること」, 「(3)市長会長杯を持廻優勝杯とする」, 「(4)マ杯記念杯は副賞として優勝都市に持廻授与する」, 「(5)日本体協は第10回大会まで主催し、それ以降については、その時の情勢を勘案して三競技団体で処理する」ことが決められた。翌12月9日のマ杯委員会でこの決定事項が承認され(マ杯委員会, 1955b), 以後大会は「全国都市対抗競技庭球・卓球・軟式庭球競技大会」に改称することとなる。翌年2月20日の体協時報には「マ杯大会改称」と題し、「マッカーサー元帥杯競技大会は昭和二十二年以来毎年開催、八回を継続してきたが、時代の変革は、この大会にも変格(ママ)を来たし、都市対抗の本来の姿に還えることとなつ」たとの記事が掲載されている(日本体育協会, 1955)。

このようにマ杯大会は、マッカーサーに対する人気の凋落を背景に、第8回大会(昭和29年、松山)をもって事実上廃止されたと言えよう。

5. まとめ

本稿では、マ杯大会の成立・廃止過程を明らかにしてきた。その結果以下の事柄が明らかとなった。

1. マ杯は、マッカーサーを崇拝する池田政三の働きにより出現した。杯の出現後、大会の成立に至る過程において、マッカーサー杯と大会運営の主導権をめぐる、池田政三、大日本体育会、競技団体のヘゲモニー争いへと発展したが、結局大日本体育会に大会委員会

が吸収された。しかしながら池田の影響力を色濃く残しながら、後昭和22（1947）年8月29日に第1回大会が西宮市で開催され、大会が成立した。

2. マ杯大会は、日本の独立を契機として強まった大会への批判、そしてそれを受けての体協の大会からの離脱の表明から、大会存続の危機に陥った。これにはマッカーサーの連合国軍最高司令官解任、及びその後の「日本人十二歳」発言が大きく影響したと考えられる。そのためマ杯委員会側は、昭和28年（岡山市）から大会名を「マッカーサー元帥杯記念全国都市対抗競技大会」へと改称し一時的な解決を図ったが、地元開催地の補助金に依存した大会運営、大会名称への批判などをうけて、第9回に当たる昭和30年の会津若松大会から「全国都市対抗庭球・軟式庭球・卓球競技大会」へと改称せざるをえなかった。これにより事実上マ杯大会は第8回（昭和29年、松山市）をもって廃止されたとみなすことができる。
3. マ杯大会は、チーム内に必ず女性や老人（壮年）を含めることが定められ、また大会参加料も無料であった。これに加え、大会は都市対抗形式で行われ、全国都市予選→都道府県予選→地域予選→中央大会で構成されており、全国地方末端にまでスポーツを浸透させるといふ、スポーツ層の底辺拡大を促す方策が採られた大会であった。マ杯大会は、戦後日本スポーツ界におけるスポーツの普及と大衆化の一翼を担った競技会であったと評価できる。
4. 占領軍側にとってマ杯大会は、スポーツによる民主化政策の一つとして位置づけられ、戦後日本のスポーツ競技会のモデルにしようと考えていたことが明らかとなった。

以上総括すると、マ杯大会は、「マッカーサー」という時の最高権力者の名を冠に据えたがために、その盛衰を直接的に反映した。それ故に、戦後スポーツ復興の礎となった大会であっ

た。しかし、マッカーサーの失脚、加えて「日本人十二歳」発言を契機とする人気の凋落から、「国民は一転して権力者と占領という事態そのものを記憶の奥に留めようとする」（袖井、1970, 2002）（ジョン・ダワー、2001）。そのような中で、マ杯大会は歴史に埋没した大会となったと見ることができよう。だが、戦後スポーツ史研究の中にまでそのような埋没を許してきたことは慚愧の念に堪えない。現在につながる権力とスポーツの問題、スポーツ統括組織としての体協の問題、占領政策とスポーツの問題などを胚胎した戦後スポーツの出発点が凝視されていないことを意味するからである。

付記

本論文は、山岸孝吏、平成14年度金沢大学教育学研究科修士論文「マッカーサー元帥杯スポーツ競技会の成立廃止過程に関する研究」の一部である。本論文は先行研究の検討が必ずしも十分ではないこと、史料とされている回顧録の信憑性、経費面からの検討など、課題は残しているが、スポーツと権力の関係を考える上で、重要な指摘がなされていると思われる、本紀要に収録したものである。したがって本論文の業績は山岸に属するものであることを明記しておきたい。（大久保英哲）

一文献一

- 朝日新聞（1951）昭和二十六年五月十六日付一面
大日本体育会（1947a）昭和二十二年四月九日大日本体育会第二回理事会議事録
大日本体育会（1947b）昭和二十二年四月三十日第五回理事会議事録
大日本体育会（1947c）昭和二十二年五月十四日第七回理事会議事録
大日本体育会（1947d）昭和二十二年九月三日第二十二回理事会議事録
草深直臣（1977）戦後日本体育政策史序説—その1. 戦後初期の体育政策—。立命館大学人文科学研究所紀要25：3—44
草深直臣（1979）戦後日本体育政策史序説—その

2. 戦後体育の「民主化」過程一. 立命館大学人文科学研究所紀要 29: 1—77
- 草深直臣 (1985) 現代社会体育行政の展開と課題. 立命館大学人文科学研究所紀要39: 3—66
- 草深直臣 (1990) 体育・スポーツにおける戦後改革の実証的研究、平成2年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
- 岸野雄三・大場一義・成田十次郎・稲垣正浩編 (1999) 近代体育・スポーツ史年表(三訂版)、大修館書店: 東京
- 刊行委員会 (1980) 一すじの道—池田政三の八十年—.
- マ杯委員会 (1947) 第一回マックアーサー元帥杯競技大会報告書
- マ杯委員会 (1954) 第七回マックアーサー元帥杯競技大会報告書
- マ杯委員会 (1955a) 第八回マックアーサー元帥杯競技大会報告書
- マ杯委員会 (1955b) 『全国市長会会長杯第九回全国都市対抗卓球・庭球・軟式庭球競技大会』(大会プログラム). p. 5
- 日本体育協会 (1951a) 昭和二十六年四月二十五日第三回国内常任理事会・第二回理事会議事録
- 日本体育協会 (1952a) 昭和二十七年八月十五日第十二回理事会・第十三回国際委員会合同打合会議事録
- 日本体育協会 (1952b) 昭和二十七年八月十五日第五回評議員会議事録
- 日本体育協会 (1953a) 昭和二十八年一月二十八日第二回理事会議事録
- 日本体育協会 (1953b) 昭和二十八年六月三日第六回理事会議事録
- 日本体育協会 (1953c) 昭和二十八年六月二十六日第三回評議員会議事録
- 日本体育協会 (1953d) 昭和二十八年九月三日第四回評議員会議事録
- 日本体育協会 (1954a) 昭和二十九年十月六日第八回理事会議事録
- 日本体育協会 (1954b) 昭和二十九年十一月十日第十回理事会議事録
- 日本体育協会 (1955) 体協時報 38: 415
- 日本体育協会 (1963) 日本体育協会五十年史
- 日本体育協会監修 (1978) 国民体育大会の歩み、p. 122
- 坂上康博 (2000) スポーツと天皇制の脈絡—皇太子裕仁の摂政時代を中心に—、歴史評論 602: 29—44
- 坂上康博 (2002) スポーツと政治. 山川出版社: 東京. 1—28
- 関春南 (1970) 戦後日本のスポーツ政策—オリンピック体制の確立—. 一橋大学研究年報経済学研究 14: 125—228
- 関春南 (1997) 戦後日本のスポーツ政策—その構造と展開—. 大修館書店: 東京
- 袖井林二郎 (1974) マッカーサーの二千年、中央公論社: 東京. pp. 339—348
- 袖井林二郎 (2002) 拝啓マッカーサー元帥様、岩波書店: 東京. pp. 407—408
- ジョン・ダワー: 三浦陽一ほか訳 (2001) 敗北を抱きしめて(下). 岩波書店: 東京. pp. 405—408
- 内海和雄 (1990) 「スポーツ基本法」の研究—1—戦後のスポーツの行政と法—1—. 自然科学研究(一橋大学研究年報編集委員会) 27: 1—169
- 内海和雄 (1993) 戦後スポーツ体制の確立. 不昧堂出版: 東京